

珍海撰『決定往生集』における凡夫観

成瀬隆順

一 はじめに

浄土教において凡夫の自覚を論じる際に、法然をはじめとする鎌倉期以降の浄土教者は、唐の善導が著した『観無量寿仏経疏』（以下『観経疏』）散善義に三心を解明する中、深心を釈する「二種深信」の文を重視する。これに対し東大寺三論宗の法系をうける珍海は『決定往生集』ではこの説を用いず、善導集記の『往生礼讃』（以下『礼讃』）「三心釈」⁽¹⁾中の「深心釈」に見えるほぼ同趣旨の文を依用している。恵谷隆戒氏はこの珍海の『礼讃』等の引用を以て「珍海自身の凡夫性の自覚は表面に現れていないけれども、善導の凡夫性の自覚思想を受容しているのであるから、永観と同じく痛烈な自己反省はなされた」⁽²⁾と一定の評価を与えているが、果たしてそうであろうか。『決定往生集』第五修因決定での依用が注目される、いわゆる法然の「浄土宗開宗の文」は『観経疏』散善義の「深心釈」中に説かれているため、「二種深信」の文を

未読である可能性は低いと考えられる。そこで、珍海が『観経疏』ではなく『礼讃』を用いた理由の検討を通して、珍海の凡夫観の一端を考察してみたい。

二 「出離」に関する珍海の考え

珍海は『決定往生集』の第三昇道決定の中で、曇鸞が「下品凡夫但令_下不_レ誹_二謗正法_一信_二仏因縁_一皆得_中往生_上」⁽³⁾と説く『往生論註』巻上の八番問答の第一を引用し、下品下生の往生不退について説示している。その後『礼讃』「三心釈」中の前後二心を省き、次のように「深心釈」のみを引用する。

導和尚礼讃云、問。今欲_二勸_レ人往生_一者、未_レ知、若為安心・起行・作業定得_レ往生彼国土_一也。答。必欲_レ往生彼国土_一者、如_二観経説_一者、具_二三心_一必得_二往生_一。乃至_二信_下知身是具_二足煩惱_一凡夫善根薄少、流_二転三界_一不_レ出_二火宅_一、今信_二知弥陀本弘誓願及_下称_二名号_一、下至_中十声等_上、定得_レ往生_甲、乃至一念無_レ有_二疑心_一。故名_二深心_一云。既言_二具足煩惱凡夫_一、直是常没世俗凡夫得_二往生_一也。⁽⁴⁾

いうまでもなく『礼讃』「深心釈」は、『観経疏』散善義に

深心を釈して「二者深心。言深心者、即是深信之心也。亦有二種。一者決定深信、自身現是罪惡生死凡夫、曠劫已來常沒常流轉、無有出離之緣。二者決定深信、彼阿彌陀仏四十八願攝受衆生。無疑慮、乘彼願力、定得往生。又決定深信」とある、「信機」と「信法」に深心を分かつ「二種深信」の文とはほぼ同じ内容が述べられている。古來この二つの記述については「善根薄少」と「無有出離之縁」の差異が論じられているが、珍海にとつては「散善義」の「無有出離之縁」では齟齬が生じてしまう。というのも衆生は自らの力で出離できる存在というのが珍海の考えであり、『決定往生集』の序文に次のように述べている。

良以衆生自有出離之分。淨土正是引物之方。若言凡愚卑劣不堪往生者、則衆生終無出離之期、諸仏即闕引物之功。定知依教願生必得往生。

そしてこの「出離之分」について第四種子決定の中で二義をあげる。

第四種子決定者、此有二義。一者中道仏性を成、亦名正因、亦名本覺。衆生本來有此覺性。由此性故必得解脫。道理雖然、若無聞法發心等縁、此性不能自然解脫。今遇釈迦説西方教、聞而奉行、內有仏性。待此外縁、因縁具足必出離。……（中略）……二者西方行者必有宿善……

衆生は往生の因として中道仏性を有しているため「必応

出離」であり、また西方の行者には宿善があるとするので、「無有出離之縁」では食違いが生じてしまう。そのため「善根薄少」と往生の因を少なからず認める『礼讃』の記述が適していたことが、引用の理由として一つ考えられる。

この中道仏性を備えていることは、永観も『往生拾因』の中で「今法身者入阿字門、悟一切法本不生際、是則中論所説八不之中第一不也。謂縁生諸法各無自性。無自性故本不生也。……（中略）……仏与衆生、同体無異。衆生同体仏利穢土、無障、諸仏同体衆生往淨土、何隔」と述べている。さらに中道仏性と宿善の二つの往生の因により、永観は『往生拾因』で「今観行者法身同体、妄輕自身、勿生疑惑」⁽⁹⁾と、『往生講式』では「我等思往昔結縁、宿善如恒沙、妄輕自身、心不怯弱」⁽¹⁰⁾と自らを輕んじることを誡めている。この考えを承け珍海は『決定往生集』第三昇道決定で、「此等衆生生彼国、已經久乃発大菩提心、入不退位。世俗凡夫常没之類、寧可於中自憚、非分乎。」⁽¹¹⁾と往生への非分を憚る必要はないと述べる。

これらの姿勢より判断するに「信機」への留意は余りなされなかったと考えられ、法然以降の鎌倉浄土教者と比較すると、徹底した凡夫の自覚意識には達していなかったことが理解できる。また、『決定往生集』の中心となる第五修因決定において、三心を釈するにあたり「三修心往生、心有二種。

一至誠心。起行不虛実心求_レ往。二者深心。信樂慇至欲_レ生_二彼國_一。三迴向發願心₍₁₂₎と、慧遠の『觀無量壽經義疏』を依用し、愚者の自覺を認知するという善導的な考えのない深心の解釈をしている。むしろ坪井俊映氏も述べるように『礼讚』『深心釈』の引用は、曇鸞『往生論註』に説かれる「信仏因縁」の「信」を説明するために用いられたと考えて差し支えないであろう。⁽¹³⁾ 珍海は「信」に関して『決定往生集』序文に次のように述べている。

其信心者、若於_二如_レ上文理之中_一心生_二信受_一即名_二決定_一。以_二決定_一者為_二信相_一故。故觀經云、必生_二淨國_一心得_二無疑_一。已上 無疑即信。決定稱也。又由_レ信故必得_二往生_一。故經說言、若能深信無_二狐疑_一者必得_二往生_一阿彌陀仏國₍₁₄₎。鼓音聲經 由_レ此_レ必知、下輩之人雖未_二一向專精信受_一、而由_二暫信_一亦得_二往生_一。此乃信心決定義也。

このように、「決定」と「信」の関係を釈するに際し「無疑即信。決定稱也。又由_レ信故必得_二往生_一。」と述べ、更に『鼓音聲王經』⁽¹⁵⁾を引用し、深く信じて疑いが無ければ阿彌陀仏國に往生が可能であると強調することからも、珍海の『礼讚』『深心釈』引用の意図が理解できよう。

三 『往生要集』の影響と「通九品」の解釈

また、源信の『往生要集』が与えた影響も看過できない。『往生要集』の大門第五「助念方法」では修行の四相、即ち

四修の際に用心することは何かとの問いに、『礼讚』の「三心釈」を『決定往生集』とは違い三心を全て引用している。

問。既知、修行総有_二四相_一。其修行時、用心云何。答。觀經云、若有_二衆生_一願_レ生_二彼國_一者、發_二三種心_一即便往生。一至誠心、二深心、三迴向發願心。善導禪師云、一至誠心、謂礼拝・讚歎・念觀三業必須_二真実_一故。二深心、謂信_レ知自身是_レ具_二足煩惱_一凡夫、善根薄少、流_二轉三界_一未_レ出_二火宅_一、今信_レ知阿彌陀本弘誓願、及_レ下_二稱名号_一下至_中十声一声等_上、定得_二往生_一。乃至一念無_レ有_二疑心_一。三迴向發願心、謂所作一切善根、悉皆回向願_二往生_一故。具_二此三心_一必得_二往生_一。若少_二一心_一即不_レ得_二生_一。略抄_レ之。經文雖_レ在_二上品上生_一、如_二禪師釈_一者、理通_二九品_一。余師釈不_レ能_レ具_二鼓音聲經云、若能深信無_二狐疑_一者、必得_二往生_一阿彌陀仏國_一。涅槃經云、阿耨菩提、信心為_レ因。是菩提因雖_二復無量_一、若說_二信心_一則已攝_二盡_一。已上 明知、修_二道以_レ信為_レ首_一。

ここでは、先の『決定往生集』序文で「決定」と「信」の関係を釈する際に引用された『鼓音聲王經』が確認できる。また、源信の「修_二道以_レ信為_レ首_一」との考えは、『決定往生集』が「信」を主題に記述されることに繋がると推察される。さらに注意すべきは「如_二禪師釈_一者、理通_二九品_一」と註にある、三心が上品上生のみに限られないとする説示である。この箇所は先学が指摘する通り、法然が『往生大要抄』で「されは善導の觀經の疏に九品の文を釈する下に、一一の品ことに、弁定三心以為正因とさためて、此三心は九品に通すべしと釈し給へり。恵心も是をひきて、禪師の釈のときは、理九品に通すへしとこそはしるされたれ。」⁽¹⁷⁾と示す、散善義冒

頭の十一門義によるものと見るべきであろう。実はこの十一門義は管見の限りでは散善義を初めて引用したとされる『安養集』には見出すことができない⁽¹⁸⁾。珍海が『安養集』によって『観経疏』を披見しているならば「通九品」は了解できず、従って『往生要集』に導かれ上品上生のみに限る記述のない『礼讃』『深心釈』を用いたとも考えられるのである。

四 結び

以上考察してきたように、珍海は決定往生の因として衆生に本来備わる仏性と宿善を認めるため、「無_レ有_二出離之縁_一」とする『観経疏』では齟齬をきたし、敢えて用いなかったと考えるのが自然の流れであろう。上品上生のみに限られていない『礼讃』『深心釈』の引用はなされるが、これは下品下生の世俗凡夫が、疑心無くして（信心をもって）必得往生する可能性を主に示すためであり、曇鸞『往生論註』に説かれる「信仏因縁」の「信」を説明するために用いられたと考えられる。『決定往生集』の中心となる第五修因決定では慧遠の「三心釈」を用い、また自らを軽んじることを戒めている姿勢からも、「信機」に対する留意はさほどなされているとは言えず、「信機」「信法」の「二種深信」を重んじる法然以降の鎌倉浄土教者と比較すると、凡夫の自覚意識は高くはなかったと理解できるのである。

珍海撰『決定往生集』における凡夫観（成瀬）

- 1 大正四七・四三八頁下。
- 2 惠谷隆戒「日本浄土教思想史上における凡夫性自覚過程について」（『仏教文化研究』一三、一九六六年）、『浄土教の新研究』（山喜房仏書林、一九七六年再録）二〇二頁参照。
- 3 大正四〇・八三三頁下／八三四頁上。
- 4 大正八四・一〇七頁中。
- 5 大正三七・二七一頁上／二七二頁中。
- 6 大正八四・一〇二頁下。
- 7 大正八四・一〇七頁下。
- 8 大正八四・九九頁上。
- 9 大正八四・一〇〇頁中。
- 10 大正八四・八八一頁下。
- 11 大正八四・一〇七頁上。
- 12 大正八四・一〇八頁下。
- 13 坪井俊映『法然浄土教の研究——伝統と自証について』（隆文館、一九八二年）一〇三頁参照。
- 14 大正八四・一〇三頁上。
- 15 大正一二・三五三頁上。
- 16 大正八四・五八頁上／中。
- 17 浄全九・四八五頁上。
- 18 梯信暁『宇治大納言源隆国編安養集本文と研究』（西村岡紹監修、百華苑、一九九三年）参照。

〈キーワード〉 珍海、『決定往生集』、善導、深心釈

（早稲田大学大学院）